

# 日本語・日本語 教育を研究する

第27回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは〔認知心理学と日本語学習指導〕です。

## 認知心理学と日本語学習指導



広島大学大学院教育学研究科教授 森 敏昭

認知心理学は日本では1970年代の後半頃から急速に発展した心理学の新しいアプローチで、人間の認知過程の仕組みについて研究する学問である。すなわち認知心理学は、読書、計算、推理、意思決定など人間のさまざまな認知活動の仕組みを明らかにすることを目指している。とりわけ言語情報の処理過程の仕組みを明らかにすることは、認知心理学のもっとも重要な研究テーマの一つである。なぜなら、言語は人間の認知活動を根底で支える、きわめて重要な心の働きだからである。本稿では、そうした言語の認知心理学の知見に基づいて、望ましい日本語学習指導のあり方について考えてみることにしよう。

### 1. 語彙表象モデルから日本語教育への示唆

あらゆる言語習得の基本は語彙の習得である。では、第二言語（または外国語）の語彙を習得する仕組みはどうなっているのだろうか。この点に関して、認知心理学者のペイヴィオはバイリンガル二重符号化説と呼ばれる理論を提唱している。これは、バイリンガル者や第二言語の学習者が、第二言語（外国語）の語彙と第一言語（母国語）の語彙をどのように記憶しているかを説明するための理論である。

この理論によると、例えば日本語と英語のバイリンガル者の場合、「犬」は日本語システムに、「dog」は英語システムに、「犬のイメージ」はイメージシステムに保持されている。そして、これら3つの表象間にはすでに強固な結び付きが形成されており、犬を見れば「犬」と「dog」という単語が同時に思い浮かぶはずである。では、英語を学習中の日本人の場合はどうだろうか。もちろん「犬」という日本語はすでに十分に習得しているはずであるから、犬を見れば即座に「犬」と言うことができるだろう。そして、もし「dog」という英単語を習った後であれば、「犬」を「dog」に（あるいはその逆に）翻訳することも、それほど難しくはないだろう。しかし、犬を見せて「犬」と言うまでの時間と「dog」と言うまでの時間を比較する

と、どちらが長くなるだろうか。もし、英語の授業で犬のイメージと「dog」とを結びつけるような練習が十分になされていれば、バイリンガル者の場合と同様に、両者の時間に差はないはずである。ところが、伝統的な「文法訳読法」の授業を受けた生徒であれば、「dog」と言うまでの時間のほうが「犬」と言うまでの時間よりも長くなるはずである。なぜなら、「文法訳読法」では「犬」と「dog」の連合は形成されるが、「dog」と犬のイメージとの連合は形成されにくいからである。このため、犬を見て「dog」というためには、いったん「犬」に翻訳し、さらにそれを「dog」に翻訳しなければならないのである。

このバイリンガル二重符号化説は、第二言語（外国語）の語彙を習得する際には、単に「記号」と「記号」の連合として習得するべきではないことを示唆している。母国語の単語は文字という「記号」と結びついているだけでなく、イメージ、行為、感情なども密接に結びついている。そのことは、単語にはイメージや感情反応を伴う内包的な意味があることを示したオズグッドの意味空間の研究や、「腕を組む、頭をかく…」のような行為文を覚える際に、行為を実演しながら覚える方が単に文を読むだけよりも記憶成績がよくなる被験者実演効果と呼ばれる現象によって裏付けられている。また、欧米では、例えば「全身反応教授法」のような、耳で聞いた言葉を具体的な行為と結びつけるところから始める外国語の教授法なども実践されているようである。したがって、日本語教育の場合にも、この種の理論と実践がもっと広く取り入れられてもよいのではないだろうか。

### 2. 言語処理モデルから日本語教育への示唆

認知心理学の言語処理モデルでは、人が言語を理解するためには、次のような様々な言語処理が必要になると仮定されている。

(1) 辞書的処理：文を構成する個々の単語の処理。例えば、「あなたは昨日、牛丼を食べましたか？」という

質問に答えるためには、「牛丼」が何を指しているのかについての理解が不可欠である。この理解を可能にしているのが辞書の処理である。

(2) **統語論的処理**：統語論的（シンタクス）知識を利用して文の意味を解析する処理。例えば、「次の朝に正夫を新聞を読んだ」という文は文として容認できないという判断を可能にしているのが統語論的処理である。

(3) **意味論的処理**：意味論的知識を利用して文の意味を解析する処理。例えば「無色透明の黒い悲しみが、めらめらと音を立てて立ちすくんだ。」この文は文法的にはどこにも誤りはない。しかし、正常な日本語感覚の持ち主であれば、この文は日本語として不自然だと判断するはずである。この判断を可能にしているのが意味論的処理である。

(4) **語用論的処理**：発話の文脈に応じて発話者の意図を解析する処理。例えば、会社で上司が日頃あまり勤務態度のよくない部下に向かって、「君はほんとによく働いてくれるね。涙が出るほど嬉しいよ」と言った場合、これは褒め言葉ではなく「皮肉」だと理解すべきである。この理解を可能にしているのが語用論的処理である。

従来の日本語教育では、辞書的処理、統語論的処理、意味論的処理の教育に主眼がおかれ、語用論的処理の教育があまりなされてこなかったのではないだろうか？もしそうであれば、今後は語用論的処理の教育も重視されるべきであろう。筆者らが外国人留学生を対象に行った研究においても、そのことの重要性が示唆されている。

この研究では、20名の外国人留学生に、例えば講義が始まる前の教室での、「君、何か役に立ちような本を持っていない？」(依頼)のような8つの婉曲表現を呈示し、それぞれの婉曲表現に対し自分ならば日本語でどう応答するかを考えさせ、あわせて、そのように応答する理由および発話の意図を尋ねた。

以上のような手続きで収集したデータを、多変量解析法（数量化理論Ⅰ類）を用いて分析し、日本語の学習期間の長さ、滞在期間の長さ、婉曲表現の経験の有無、専攻領域の要因が婉曲表現の理解度（正答数）にどの程度の影響を及ぼすかを調べた。その結果、婉曲表現の経験の有無および学習期間の長さの影響が大きいことが明らかになった。この結果は、今後の日本語教育においては、こうした婉曲表現なども教材として積極的に取り上げることの必要性を示唆しているのではないだろうか。

### 3. 認知発達モデルから日本語教育への示唆

アメリカの心理学者ブルーナーは、表象様式の発達には活動的表象の段階、映像的表象の段階、象徴的表象の段階という3段階があり、子どもたちの発達段階にふさわしい方法で指導すれば、低年齢の子どもにも高度な教

材を理解させることが可能であるとしている。そして、幼い時に、ある教材をその年齢にふさわしい様式で学習しておけば、その教材を後に高度な様式で再学習する場合の助けとなると考えている。例えば、子どもが集合の概念を学ぶ場合、その子どもが活動的表象の段階にあれば「イス取りゲーム」などの遊びを通じて集合の概念を学び、その子どもが映像的表象の段階に達すればブロックなどの具体物を用いて学び、さらに象徴的表象の段階に達すれば数式や記号を用いて抽象的な様式で学ぶ、というように、同一教材を子どもの発達段階に応じた方法で何度も繰り返し学習させるのである。このような学習指導法は、ちょうどラセン階段に例えることができる。つまり、あたかもラセン階段を昇るように、低次なレベルから次第に高次のレベルへと学習を深化させていくのである。

このラセン型カリキュラムのアイデアを日本語教育の場合に当てはめれば次のようになる。すなわち、ラセン型カリキュラムの日本語教育は、ちょうど円錐の側面にラセン状の軌跡を描くように展開する。まず「聞く」ことから始めて、「話す」こと、「読む」こと、「書く」ことの学習を繰り返しながら、その過程で「音法」、「語法」、「文法」、「語彙」の領域の知識を獲得しつつ、次第に高次のレベルへと進んでいくのである。

ラセン型カリキュラムは、留学生が第二言語として日本語を習得する過程も、我々が第一言語（母国語）として日本語を習得するのと同じ過程をたどるべきであることを示唆している。つまり、母国語の習得過程はラセン型カリキュラムに従っており、母国語は「象徴的表象（文字）」と結びついているだけでなく、「映像的表象（イメージ）」や「活動的表象（行為）」とも結びついている。このため、日常世界のリアルな体験を記述することができるのである。ところが、日本の英語教育で伝統的に採用されている文法訳読法中心の授業では、いきなり「文字を読む」ことから始まる。しかし、そのような教授法では、ラセン階段が「聞く」と「話す」の領域で途切れてしまい、学習者は「読む」の領域を垂直によじ登る他はない。いわば断崖絶壁をザイルとピッケルでよじ登るようなものである。これでは、よほどの才能と忍耐力に恵まれた人でない限り、途中で挫折してしまうのは火を見るよりも明らかであろう。

#### 認知心理学と日本語教育に関する基本的な参考文献

- 大村彰道(監修)、秋田喜代美・久野雅樹(編)、2002『文章理解の心理学—認知、発達、教育の広がりの中で』北大路書房
- 森敏昭(編)、2001『おもしろ言語のラボラトリー(認知心理学を語る2)』北大路書房
- 海保博之・柏崎秀子(編)、2002『日本語教育のための心理学』新曜社